令和６年度　校内研修全体計画

１　研究主題

「池上型スタディ」を通した教育活動の創造

～自ら課題を見つけ、対話と交流で学びを深めていく児童の育成を目指して～

２　研究の仮説

○「池上型スタディ」を通した教育活動の創造し、対話的・協働的な学びの実現を図ることで、未来を切り拓く子どもを育成することができるだろう。

３　研究の視点

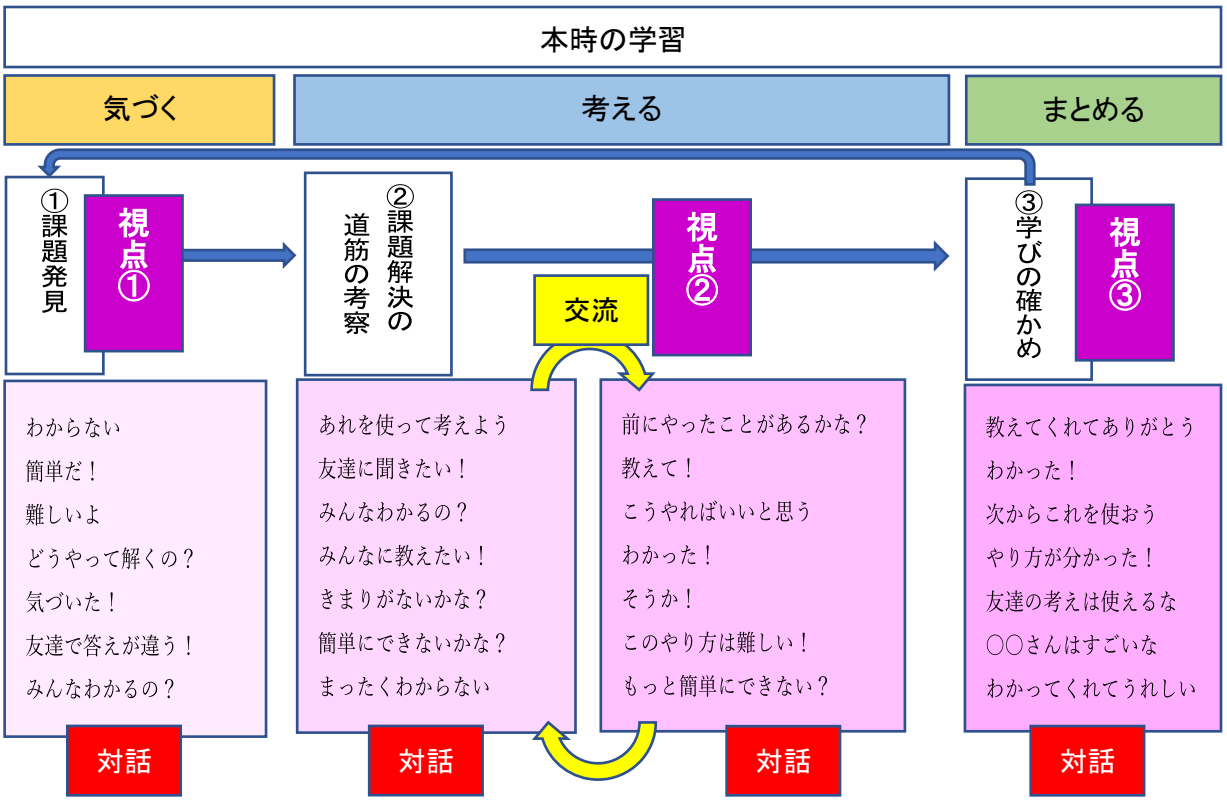
池上型スタディとは

「①課題発見」「②課題解決の道筋の考察」「③学びの確かめ」の３つの学習活動の際に、子どもたちの対話活動、交流活動を取り入れ、子どもたちの学びを深めていく授業展開を「池上スタディ」とした。

「①課題発見」は、課題解決のために困ったことや自分と他者の考えのずれなどを認識する場となる。課題解決のための不明な点、困難な点を明らかにし、自分にとって何がわからないのか、友達がわかっているところが何かなどの情報を整理していきながら、友達と共に学習のめあてを設定していく時間となる。

「②課題解決の道筋の考察」は、既習内容を振り返ったり、わかっている情報を整理したりしながら、課題解決の道筋を明らかにする場となる。課題解決の方法がわかっている子もいれば、どのようにすればよいか悩んでいる子もいる。そのような場で、対話と交流を行い、解決方法の道筋を集団で明らかにしていくことで、自ら学ぶ意識を高めていく。

「③学びの確かめ」では、本時の学習で気づいたことや課題解決のポイントを対話や交流を通して、子どもたちの思いを共有していく。学んだことの理解を深めるとともに、課題解決に対する多様な意見を尊重し、それらの意見を次の学習へとつなげていく学習習慣を育てていく場としていく。



池上スタディのイメージ図

「①課題発見」「②課題解決の道筋の考察」「③学びの確かめ」での対話活動、交流活動を活発に行うために、以下の点を研究の視点とする。

（１）子どもが考えたくなる学習課題や問いの工夫

授業での課題に対して、子どもが「知りたい」「聞きたい」「話したい」「調べたい」など、自ら考えたくなる学習課題や問いの工夫を行う。また、他者の考えや意見を聞きたくなる課題設定や問い返しの工夫を行う。

（例）・考えのずれや子どもから出た疑問をもとにして、学習課題や問いを設定する。（ただし、指導事項や子どもに身に付けさせたい力と結び付ける）

・授業の中や振り返りで、新たに生まれた問いを次時に生かす。

・協働することで解決しそうな課題や、対話で考えが深まったり視野が広がったりするような学習課題を考える。

（２）「対話」と「交流」を促すための手立て

「対話」とは、自分の考えを相手に理解してもらおうする意識をもちながら伝え合うことと定める。

伝える相手にわかるように、考えの図式化、可視化などを工夫することによって、伝える相手の立場に立った表現を意識させていく。また、聞く側も相手の考えを尊重する態度をもつことを徹底する。自分の考えを伝えることに苦手意識をもっている子どももいるため、まずは、話をしっかりと聞くことから始め、スモールステップで「相手の話に対する反応を示す」「賛成、反対の意見を出す」「感想や意見を出す」「ほかの考えを出す」など段階的に対話の質を高めていくことを目指していく。

「交流」とは、「対話」で現れた考えをもとして、自分と友達の考えの同じところや違うところを比べ、課題解決のためにどのような方法をあるのかを、協働でまとめていくことと定める。

子どもたち各々が自分の考えをもつことから「交流」が始まる。子どもたちの中には、この時点で「解決の方法がわからない。自分の考えに自信がない。」とこともある。そのような考えも認め、自分と違う考えをもつ人もいる中で、課題を解決させていく。交流をスムーズに行うために、ロイロノート等の ICT 機器を活用したり、意見をまとめやすい学習シートを活用したりする。教科の特質や学習内容、子どもの実態に応じて、「交流」を活発に行わせるための手立てを考えることが大切である。

（例）・『比較する』『分類する』『関係づける』などの目的に応じて、「ベン図」「XYW チャート」「フィッシュボーン」「クラゲチャート」「ピラミッドチャート」などの思考ツールを活用する。

・ホワイトボードや付箋、短冊などを使い、対話を通して、自分の考えを伝えたり、みんなの意見を比較や分類したりする。また、ワークシートを工夫する。

・ポートフォリオにより子どもの学習過程を可視化する。教員は子どものポートフォリオを点検・評価することで、次時の授業や単元で対話を促すためのヒントにする。

（３）自分の学びを自覚できる振り返りの場の工夫

自分の学びを確認する場として、「学習内容のまとめ」「自分の気づきや感想」など授業の中では、複数回のまとめの作業を行う場合がある。そこで、まとめの時間を柔軟に取り扱い、子どもたちの考えをもとに、学びを共有する時間を設定する。子どもたちの考えが活発に伝え合われる場においても、「小まとめ」という形式で、これまでの時間ででてきた意見をまとめていく。細かに学習を立ち止まり、学びを全体で確認していくことで、気づいたことや理解したことを明らかにしていく。そのことにより、本時の学習で得たことを次の学習につなげることがしやすくなり、学びの循環を促すことができると考える。また、自己の変容を客観的に認知できるふりかえりシートを活用することにより、より自己の成長に気づき、意欲を高めることができると考える。

（例）・教科や単元の特性、子どもの実態に応じて振り返りの視点を設ける。振り返りに対して教師がフィードバック（価値付け）を行い、必要に応じて全体に共有する。

・目的に応じて、授業の終末に限らず、導入や展開で振り返りを行う。

・振り返りシートやロイロノートなどに振り返りを記録していくことで、自己の成長を自覚できるようにする。